

昔むかし、あるところに、王さまとお妃がいました。ふたりには子どもがなかったの
で、いつも神さまに、子どもをおめぐみくださいと祈っていました。

ある晩、王さまとお妃は同じゆめを見ました。お城の近くに静かな池があって、その
池に金のひれを持つすずきがいつぴきすんでいる、お妃がそのすずきを食べれば子ども
を身ごもるというゆめでした。

王さまは、目が覚めるとすぐに、漁師たちを呼んで、すずきをとらえてくるように命
じました。夜が明けると、漁師たちは池に行つてあみを投げました。最初のあみに、金
のひれを持つすずきがかかりました。お妃はすぐに、料理女にすずきをわたしていま
した。

「これを、お昼の食事に出しておくれ。だれも触らないように、気をつけるんですよ」

料理女は、すぐにすずきを料理しました。お妃は、すずきをすっかり平らげました。

料理女は、そのお皿をぺろつとなめました。すずきを洗った水を庭に出しておく、雌
牛がその水を飲みました。

やがて、お妃と料理女と雌牛がいちどに身ごもつて、みんなが同じ時刻に男の子を生
みました。お妃の子イワン王子、料理女の子イワン、牛の子イワンが生まれたのです。

三人のイワンは、一時間ごとに大きくなり、パンのようにぐんぐんのびて行きました。

三人は、顔かたちがそっくりで、だれがイワン王子で、だれが料理女の子で、だれが牛
の子か、見分けがつきませんでした。違いがあるといえば、外の遊びから帰ったとき、
イワン王子はさつと服を着替え、料理女の子イワンはまっさきにおやつを食べ、牛の子
イワンは、すぐに横になつて寝てしまうのでした。

十歳になったとき、三人のイワンは、王さまにいました。

「五十プードの重さの鉄の棒を作ってください」

王さまは、かじ屋に命じて、五十プードの鉄の棒を作らせました。この鉄の棒を持ち
上げるなんて、だれにもできませんでしたが、三人のイワンたちは、まるで羽ペンでも
回すように、指先でくるくると鉄の棒を回して見せました。

イワン王子はいました。

「三人で力比べをしようよ。勝った者が一番上の兄さんになるんだ」

牛の子イワンは、

「いいとも、鉄の棒でおれたちの肩をたたいて見ろよ」といいました。イワン王子が、
鉄の棒で、料理女の子イワンと牛の子イワンの肩をたたくと、ふたりとも、ひざまで土
にめりこんでしまいました。こんどは、料理女の子イワンがたたきました。すると、イ
ワン王子も牛の子イワンも胸まで土の中に埋まってしまいました。そこで、牛の子イワ
ンが、イワン王子と料理女の子イワンをたたきました。ふたりは、首まで土の中に埋ま
ってしまいました。

イワン王子はいました。

「もういちど、力比べをしよう。鉄の棒を空に投げ上げて、一番高く放り投げた者が一番上の兄さんになるんだ」

イワン王子が投げると、鉄の棒は十五分たって落ちて来ました。料理女の子イワンが投げると、三十分たって落ちて来ました。牛の子イワンが投げると、一時間たってやっと落ちて来ました。イワン王子と料理女の子イワンは、

「牛の子イワン。おまえが一番の兄さんだ」といいました。

三人が庭園を散歩していると、とほうもなく大きな岩がありました。

「これを動かせないかしら」と、イワン王子がいいました。そして、両手で動かそうとしましたが、岩はびくともしませんでした。料理女の子イワンがやってみると、岩はほんの少しぐらっと動きました。牛の子イワンが、岩にかた足をかけると、岩はごおっとものすごい音をたてて、庭園じゅうの木を押し倒して転がって行きました。岩の下には、ぼつかりと大きな穴蔵があいていました。そこに、三頭の駿馬が立っていました。側に、戦のための馬具もかかっていました。三人は、王さまのもとに駆けつけていました。「わたしたちを祝福して、見知らぬ国をめぐる旅に出してください。力を試してみたいのです」

王さまは、三人に祝福をあたえ、旅の費用をたっぷりあたえました。三人は、王さまに別れを告げて、駿馬にまたがって旅に出ました。

三人のイワンは、谷をわたり、山をこえ、草原を横切って馬を進めました。やがて大きな森にやって来ました。森の中に、一軒の小屋が、にわたりの足とやぎの角の上に立って、くるりくると回っていました。

「小屋よ、小屋。森に背を向け、こちらを向け」と、三人はいいました。小屋は、こちらを向いて止まりました。中に入って行くと、だんろの上にババ・ヤガーが寝ていました。

「ふん、ふん、ふん。わしはこれまで、ロシア人のすがたを見たこともにおいをかいだこともなかったが、きょうはむこうから、スプーンに乗って、口の中へ転がり込んできたようだ」

牛の子イワンは、ババ・ヤガーにいました。

「おい、ばあさん。さっさと暖炉から下りてこい。どちらへお出かけですかとたずねたら、ていねいに教えてやるぞ」

ババ・ヤガーは、だんろから下りると、ていねいに頭を下げていいました。

「こんにちは、牛の子イワン。これからどちらへお出かけですか」

「ぼくらは、スモロージナ川の木橋へ、怪物をやっつけに行くんだ」

「それはけっこうなことだ」

三人は、ババ・ヤガーの小屋でひと晩泊めてもらいました。

あくる朝早く、三人は出発しました。スモロージナ川のほとりまで来ると、いちめんに人間の骨が積み重なっていました。そこに、だれも住んでいない小屋があったので、牛の子イワンはいいました。

「この小屋に泊まって、交代で木橋を見張ろう」

三人はくじ引きをして、一日目はイワン王子が見張りに立つことになりました。夜になると、イワン王子は木橋の側のしげみにかくれました。けれども、すぐに眠りこんでしまいました。

牛の子イワンは、もともとイワン王子を当てにしていませんでした。真夜中、牛の子イワンは、剣とたてを持って、木橋のたもとに立ちました。とつぜん、川の水が波立って、かしの木でわしたちがさけび声をあげたかと思うと、六つの首を持った怪物がすがたをあらわしました。怪物は、馬に乗り、肩にからすをとまらせて、犬を後ろにしたがえていました。いきなり、馬がけつまずき、からすが羽ばたき、犬が毛を逆立てました。六つの首の怪物はさけびました。

「どうしたのだ、やせ馬め、よろめいたりして。おい、からす、なぜ羽ばたくのだ。犬ころよ、なぜ毛を逆立てるのだ。牛の子イワンがここに来ていてもいいのか。やつはたしかに豪傑だが、まだ生まれてなんかいるものか。たとえ生まれていても、戦うことなどできやしない。やつを掌に乗せてばちんとたたけば、ぐにやりとつぶれておしまいさ」

牛の子イワンは、飛び出して行って、どなりかえしました。

「でたらめをいうな。まだ豪傑に会ったこともなくせに。さあ、力比べをしよう。勝ってから自慢するがいい」

牛の子イワンと怪物は、はつしとぶつかり、激しく打ち合いました。大地がうめき声を上げました。牛の子イワンが力いっぱい切りつけると、怪物の首が三つすつ飛びました。

「待ってくれ、牛の子イワンよ。ひと息入れさせてくれ」

「とんでもない。きさまにはまだ首が三つもあるが、おれの首はたったひとつだ。きさまの首がひとつになったら、ひと息入れるでしょう」

牛の子イワンは、怪物の残りの首を切り落とし、胴体を切りきざんでスモロージナ川に投げこみました。そして、六つの首を木橋のたもとに積み重ねて、小屋にもどりました。

朝になって、イワン王子が帰って来たので、牛の子イワンは聞きました。

「どうだ。何か見なかったか」

「いいや。ハエいっぴき見なかった」

つぎの晩は、料理女の子イワンが見張りに立ちました。料理女の子イワンも、しげみのかげでぐっすり眠ってしまいました。

牛の子イワンは、もともと料理女の子イワンを当てにしていませんでした。それで、真夜中になると、剣とたてを持って、木橋のたもとに立ちました。とつぜん、川の水が波立って、かしの木でわしたちがさけび声をあげたかと思うと、九つの首を持った怪物がすがたをあらわしました。いきなり、怪物の馬がけつまずき、からすが羽ばたき、犬が毛を逆立てました。怪物は、馬の尻をぴしやりとたたき、からすの羽と犬の耳をたたいてさけびました。

「どうしたのだ、やせ馬め、よろめいたりして。おい、からす、なぜ羽ばたくのだ。犬ころよ、なぜ毛を逆立てるのだ。牛の子イワンがここに来ていてもいいのか。やつはたしかに豪傑だが、まだ生まれてなんかいるものか。たとえ生まれていても、戦うことなどできやしない。指一本でひねりつぶしてみせる」

牛の子イワンは、飛び出して行って、どなりかえました。

「でたらめをいうな。まず神に祈るんだ。それから手でもあらって仕事にかかれ。どっちが勝つか分からんぞ」

牛の子イワンが剣をふた振りすると、怪物の首が六つずつ飛びました。怪物も負けずに打ちかかり、イワンは、ひざまで土の中にめりこみました。イワンは、土をひとすくいひつつかんで、怪物の目に投げつけました。怪物が目をごすっているすきに、イワンは、残りの首を切り落とし、胴体を切りきざんでスモロージナ川に投げこみました。そして、九つの首を木橋のたもとに積み重ねて、小屋にもどりました。

朝になって、料理女の子イワンが帰って来たので、牛の子イワンは聞きました。

「どうだ。何か見なかったか」

「いいや。ハエいっぴき見なかったし、蚊がブンと鳴きもしなかった」

三日目の晩、牛の子イワンは、白い手ぬぐいを壁にかけ、その下に鉢を置いて、ふたりにいいました。

「今夜は恐ろしい戦いになるだろう。おまえたち、ひと晩じゅう寝ずにいて、この手ぬぐいから血がどれほどしたるか見ていてくれ。鉢に半分たまったら、上々の首尾だ。鉢に一杯たまっても、大したことはない。だか、もしも血がふちからあふれ出したら、すぐにおれの駿馬をくさりからはなし、ふたりでおれを助けに来てくれ」

牛の子イワンは、剣とたてを持って、木橋のたもとに立ちました。とつぜん、川の水が波立って、かしの木でわたしたちが叫び声をあげたかと思うと、十二の首を持った怪物がすがたをあらわしました。怪物の乗った馬は十二のつばさがあつて、体は銀色でしつぽとたてがみは金色でした。いきなり、馬がけつまずき、からすが羽ばたき、犬が毛を逆立てました。怪物は、馬の尻をぴしやりとたたき、からすの羽と犬の耳をたたいてさげました。

「どうしたのだ、やせ馬め、よろめいたりして。おい、からす、なぜ羽ばたくのだ。犬ころよ、なぜ毛を逆立てるのだ。牛の子イワンがここに来ていてもいいのか。やつはたしかに豪傑だが、まだ生まれてなんかいるものか。たとえ生まれていても、戦うことなどできやしない。わしが、ふっとひと息吹けば、きれいさっぱり消えてなくなるさ」

牛の子イワンは、飛び出して行って、どなりかえました。

「でたらめをいうな。まず神に祈るんだ」

「おや、きさま。何しに来たんだ」

「おまえの力がどれほどか試しに来たんだ」

「きさまなどに、おれの力が試せるものか。きさまはハエみたいなもんだ」

「おれはおしゃべりに来たんじゃない。さあ、生きるか死ぬかの勝負だ」

牛の子イワンが剣をふると、怪物の首が三つすつ飛びました。怪物は、首をひろって、炎のゆびですばやくなで回しました。首は、何事もなかったかのように元通りにくつきました。怪物がイワンを打つと、イワンはひざまで土にめりこんでしまいました。イワンはいいました。

「待ってくれ。王さま同士が戦うときだって、休みがある。おれたちの戦いだって休みがあつてふしぎはない。三度までは休ませてくれ」
怪物は承知しました。

牛の子イワンは、右手の手袋を脱いで小屋めがけて投げつけました。手袋は小屋のまどを残らずたたき割りました。けれどもふたりのイワンは眠りこけていて、何も気づきませんでした。

牛の子イワンは、力をこめて剣をふりました。すると、怪物の首が六つすつ飛びました。怪物は、首をひろって、炎のゆびですばやくなで回しました。首は元通りにくつきました。怪物がイワンを打つと、イワンは腰まで土にめりこんでしまいました。

「もういちど、休ませてくれ」と、牛の子イワンはいって、左手の手袋を小屋めがけて投げつけました。手袋は、小屋の屋根を突きぬけましたが、ふたりのイワンは眠りこけていて、何も気づきませんでした。

牛の子イワンは、さらに力をこめて剣をふりました。すると、怪物の首が九つすつ飛びました。怪物は、首をひろって、炎のゆびですばやくなで回しました。首はまたもや元通りにくつきました。怪物がイワンを打つと、イワンは肩まで土にめりこんでしまいました。

「もういちど、休ませてくれ」

牛の子イワンは、帽子を脱いで小屋めがけて投げつけました。帽子が当たって小屋はくずれおちました。

ふたりのイワンは、やつと目を覚ましました。鉢を見ると、ふちから血があふれ出し、駿馬はいないで鎖を切ろうとしていました。ふたりは、大急ぎで馬を放し、かけ出しました。

駿馬は、木橋まで来ると、怪物をけりつけました。そのすきに、牛の子イワンは土の中からはい出して、怪物の炎のゆびを切り落としました。つづいて、十二の首を切り落とし、胴体を切りきざんでスモロージナ川に投げこみました。そこへ、ようやく、ふたりのイワンがかけつけました。牛の子イワンは、木橋のたもとに積んである怪物たちの首を見せていいました。

「寝ぼすけめ。あやうく首を取られるところだった」

あくる朝早く、牛の子イワンは広い野原に出て行って、体を地面に打ち付けて、一羽のすずめになりました。それから、白い石の宮殿に飛んで行って窓辺にとまりました。魔女が、すずめに麦をまいてやっていいました。

「かわいいすずめや。聞いておくれ。牛の子イワンが、娘たちの夫を皆殺しにしたんだよ」

すると、娘たちがいました。

「嘆くのはやめて、お母さん。わたしたちがきつと仇を討つから」

そして、末の娘は、

「わたしはやつを飢えさせてやる。そして、金や銀の実をつけたリンゴの木に化けて待つてるの。やつが実をもごうとするとところを、ひと突きするのよ」といいました。中の娘は、

「わたしはやつをのどのかわきで苦しめてやる。そして、井戸に化けて、水に金と銀のコップを浮かべておくの。やつがコップを取ろうとしたら、水に引き込んでおぼれさせるのよ」といいました。上の娘は、

「わたしはやつを眠くてたまらなくさせる。そして、黄金のベッドに化けるの。やつがベッドに寝たら、焼き殺すのよ」といいました。

牛の子イワンはこの話をすっかり聞くと、小屋に飛んで帰り、地面に体を打ち付けて、元の姿にもどりました。それから、三人のイワンは、王さまの城へ帰るために出発しました。

旅を続けているうちに食べるものがなくなり、ひどくお腹がすいてきました。ふと見ると、金や銀の実をつけたリンゴの木が立っていました。イワン王子と料理女の子イワンは、木に近づいて実をもごうとしました。牛の子イワンは、さつとかけよって、りんごの木をたてよこ十文字に切りました。魔女の娘は死んでしまいました。そのあと、井戸や黄金のベッドが現れましたが、牛の子イワンは、同じようにして、切り倒してしまいました。

魔女は、これを知って、みすばらしいばあさんの姿で道端に立って待っていました。

三人が通りかかると、ばあさんは、

「旦那さま。おめぐみを」といって、手をさし出しました。牛の子イワンは、金貨を一枚わたそうとしました。ばあさんは、その手をつかんで、イワンもろともあつというまに消え失せました。ふたりのイワンはおどろいてあたりを見回しましたが、ばあさんも牛の子イワンもいません。恐ろしくなって、あわてて城ににげかえってしまいました。

魔女は、牛の子イワンを、地下の国に連れて行きました。そこには魔女の夫がすんでいました。魔女は夫に、

「おまえさん、こいつが、わたしらの三人の娘とその夫たちを破滅させたんだ」といいました。魔女の夫は、たいへんな年寄りで、鉄のベッドに横たわっていました。長いまつ毛と眉毛が目をおおっていて、前が見えませんでした。魔女の夫は、十二人の男たちを呼んでいました。

「鉄の熊手を持って来て、わしのまつ毛と眉毛を持ち上げてくれ」

男たちが、まつ毛と眉毛を持ち上げると、魔女の夫は、牛の子イワンを見ていました。

「もしおまえが、行ったことも聞いたこともない国へ行って、金髪の巻き毛の女王を連れて来たら、おまえを許してやろう」

そして、イワンに一本のこん棒をわたしていました。

「このこん棒で、表に立っているかしの木を三度たたいて、『船よ、出てこい』と三べん唱えるんだ。船が出て来たら、すぐに『かしの木よ、とじろ』と三べん命令するのをわすれるな。その船に乗って、女王を探して来い」

牛の子イワンはかしの木まで行くと、こん棒で、三度どころか数えきれないほどたたいて、

「あるものは、みんな出てこい」と命令しました。すると、船が出て来たので、イワンは船に乗りこんで、

「みんな、おれについて来い」とさげびました。すると、大きな船や小さな船が数えきれないほどあらわれて、イワンの船に付いて来ました。船の人たちはみんなイワンをほめたたえました。

ひとりのおじいさんが、小舟に乗って近づいて来て、

「牛の子イワン、わしを仲間にしてくれないか」といいました。

「あんたは何が得意なんだ」

「パンが食えるよ」

「なんだ、ばかばかしい。でも、気のいい仲間がいるのはうれしいよ。こっちの船に乗りな」

おじいさんは、イワンの船に乗り移りました。すると、またひとり、おじいさんが近づいてきました。

「牛の子イワン、わしを仲間にしてくれないか」

「あんたは何が得意なんだ」

「酒が飲めるよ」

「なんだ、ばかばかしい。でも、まあいいや。こっちの船に乗りな」

おじいさんは、イワンの船に乗り移りました。すると、またひとり、おじいさんが近づいてきました。

「牛の子イワン、わしを仲間にしてくれないか」

「あんたは何が得意なんだ」

「風呂に入れる」

「なんだ、いいかげんにしろ。でも、まあいいや。船に乗りな」

おじいさんは、イワンの船に乗り移りました。すると、またひとり、おじいさんが近づいてきました。

「牛の子イワン、わしを仲間にしてくれないか」

「あんたは何が得意なんだ」

「星占いができる」

「そりゃあ、いい。船に乗りな」

おじいさんは、イワンの船に乗り移りました。これで四人になりました。すると、五人目のおじいさんが近づいてきました。

「牛の子イワン、わしを仲間にしてくれないか」

「あんたは何が得意なんだ」

「ずきになつて泳げるよ」

「よし、船に乗りな」

おじいさんは、イワンの船に乗り移りました。

こうして、牛の子イワンたちはそろつて旅を続けました。

やがて、行つたことも聞いたこともない国にやつて来ました。そこでは、イワンがやつて来ることが分かつていて、三か月ものあいだ、パンを焼いたりワインを作ったりして待つていました。パンを積んだ荷車と、ワインやビールを積んだ荷車が、数限りなくやつて来ると、牛の子イワンは、

「こりや、まいつた。こんなにたくさん、一年かかっても食べきれないよ」といいました。けれども、仲間のことを思い出しました。

「おまえたちのうちで、食べたり飲んだりが得意なのはだれだったかな」

すると、大食いとお酒飲みのおじいさんがいました。

「わしらだよ。こんなのは、お茶の子さいさいだ」

大食いのおじいさんは、何台もの荷車に積んであるパンを、一度に口に放りこんで平らげてしまいました。

「パンが足りないぞ。もつとくれ」

お酒飲みのおじいさんも、荷車にかけよつて、ワインもビールも飲みほして、たるまで飲みこんでしまいました。

「ビールもワインも足りないぞ。もつとくれ」

召使いたちは、大急ぎで金髪の巻き毛の女王のもとにかけつけて、パンもお酒も足りなかったと報告しました。

女王は、牛の子イワンをお風呂に入らせるように命じました。お風呂は三か月のあいだ続き続けていたので、炎のように熱くまっかになっていました。

「あんなところに入れば焼け死んでしまう。おい、風呂に入るのが得意なのはだれだったかな」

イワンがいうと、お風呂が得意なおじいさんがかけて来て、

「わしだ、わしだ。こんなのは、お茶の子さいさいだ」といいました。おじいさんは、お風呂に飛びこむと、すみに息をふうと吹きかけ、反対のすみにつばをべつとはきかけました。すると、お風呂はすっかり冷めてしまい、雪が積もり出しました。

「こごえてしまう。もつと火をたいてくれ」

召使いたちは、女王のもとにかけつけて、お風呂が冷めてしまったと報告しました。

金髪の巻き毛の女王は、牛の子イワンの所にやつて来て手をさしのべました。イワンは、女王を船に乗せて、出発しました。

船が進んでいくうちに、女王が突然、胸をぽんと打って星になり、空へ舞い上がってしまいました。

「しまった。もう見えないぞ」とイワンはさげびました。「おい、星占いのじいさんはど

こだ」星占いのおじいさんは、

「ここだ。こんなのは、お茶の子さいさいだ」といって、甲板に体を打ちつけて星になり、空へ舞い上がって行きました。そして、星の数を数えて、ひとつだけよぶんな星を見つけると、ぐいっと押しました。その星は流れ星になって船の上に落ちて来て、女王のすがたにもどりました。

何日か船が進んでいくうちに、女王は突然、胸をぽんと打ってかますになり、海に飛びこんで泳いでいってしまいました。

「しまった。こんどこそ消えてしまった」とイワンはさげびました。「おい、すすきになつて泳げるのはだれだったかな」

「わしだ。こんなのは、お茶の子さいさいだ」

おじいさんは、甲板に体を打ちつけてすすきになり、かますの後を追いかけてきました。そして、かますのわき腹をぐんぐんついたので、かますは船にはね上がって、女王のすがたにもどりました。

陸に着くと、牛の子イワンは、金髪の巻き毛の女王をつれて、魔女の夫の家に行きました。

魔女の夫は、十二人の男たちに、鉄の熊手でまつ毛と眉毛を持ち上げさせました。そして、金髪の巻き毛の女王を見ると、いいました。

「よくやった、牛の子イワン。おまえを地上の国に返してやろう」

「いや、待て」と、牛の子イワンはいいました。「おれは、深い穴を掘って、棒を一本かけておいた。その棒をうまくわたったほうが女王を手に入れるのだ」

「よからう。イワン、おまえが先にわたるのだ」

牛の子イワンがわたり始めると、女王は、心の中でいいました。

「白鳥の羽より軽くわたれるように」

牛の子イワンは、みごとにわたりきりました。つぎに魔女の夫がわたりました。まんなかまで来たとき、魔女の夫は足をすべらせて穴に落ちてしまいました。

牛の子イワンは、金髪の巻き毛の女王をつれて、故郷に帰りました。ふたりは、結婚式をあげ、盛大なお祝いの会をもよoshしました。牛の子イワンは、イワン王子と料理女の子イワンにいいました。

「おれは長いこと苦勞をして花嫁を手に入れたぞ。おまえたちは、だんろの上で寝そべって、れんがでもかじっているがいいや」

そのお祝いには、わたしも呼ばれて行つたけれど、みつ酒はひげをつたつて流れてしまい、一滴も口に入らなかつた。ごちそうもいろいろ出たし、おけにミルクを入れて白パンをひたしたのも出たけれど、何ひとつ食べないですわっているうち、口をぬぐおうとしてけんかになった。ずきんをかぶつたけど、首をこつんこつんとなぐられた。